HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ノーマン・エンジェルの国際主義
Author(s)	吉川, 宏
Citation	北大法学論集, 40(5-6下), 849-877
Issue Date	1990-09-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16726
Type	bulletin (article)
File Information	40(5-6)2_p849-877.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

ノーマン・エンジェルの国際主義

吉川　宏

はしがき

第二次世界大戦後の世界では、統合と分裂という相反する傾向が複雑に絡み合っているということがいわれてきた。一方には、米ソの両極化時代に進展した権力の国際化やECにみられる経済統合などがあり、他方には東西二陣営への

分裂や第三世界における数多くの国民国家の誕生があったことから、人々は諸国民間の関係の緊密化を現代の趨勢と認めながらも、この世界を統合への傾向一色で捉えるということはできなかった。これに比べれば、第一次大戦後の世界では、国際主義が一つの時代的風潮となっていたといえよう。当時におけるこの思想の一方の唱導者がここに取り上げたノーマン・エンジェルである。

ノーマン・エンジェル（Sir Norman Angell 1874-1967）は、戦争の無益性を説いた『大いなる幻想』（一九一〇年）の著者として、また一九三〇年代イギリスにおける代表的平和論者として名を残している。彼は国際平和のための長年の活動により一九三三年度のノーベル平和賞の受賞者となった。国際政治学の歴史の上では、国際政治学の誕生期に一つの基本的理論枠組――後に「理想主義的」理論として特徴づけられるところの枠組み――の形成者として位置づけることができる。[1] 本稿が取り上げる彼の国際主義についていえば、それは自由主義の国際主義あるいは経済的国際主義の系譜に連なるものであり、第一次世界大戦後の世界のなかでは国際連盟を中心とした国際協調の思想であった。また一九三〇年代の平和運動のなかでのその立場は、国際連盟による制裁をめぐって平和主義者と対立するにいたる、国際連盟擁護の立場であった。

長い間エンジェルは忘れられていたとも言える存在であったのであるが、この十年程の間にエンジェルに対する関心が高まり、いくつかの注目すべき業績が生み出されてきた。[2] 本稿は、これらの研究の成果を踏まえながら、彼の国際主義の特徴を明らかにしようとするものである。ただし本稿は、彼の国際主義をその思想的淵源にまで遡ってその特徴を明らかにしたり、そのときどきの状況と関連させながら彼の国際主義の具体的展開を跡づけたりすることを目指すものではない。ここでの検討課題は彼の国際主義の根本にある二、三の観念を明らかにすることにとどまるものである。

ナショナリズムに比べると国際主義の概念はあまり明確なものではない。ナショナリズムとの関係でいっても、両者を調和的に捉えようとする見方もあれば、これとは逆に対立的に捉える立場もある。個々の国際主義を検討するさい、両者の関係をどのような緊張関係で捉えているかを明らかにすることはきわめて重要なことと考える。国際主義は単なる国際協調主義でない場合があるからである。エンジェルについて、彼は「国際組織と主権国家間の協力の可能性を全く確信していた」[3]という評価があるが、右の視点からみた場合、この評価は妥当なものではなくなる。なぜならエンジェルは国際主義を主権やナショナリズムとの非常な緊張関係において捉えているからである。彼は、伝統的な国際政治観における権力闘争の必然性という観念に対する根本からの批判を進めていく過程で、その観念の根本的問題点を諸国民が「主権や独立を主張すること」に求めたのであった。「戦争の原因は、……主権と独立を主張する諸国民の存在である」[4]と。窺われるように、エンジェルの国際主義は単に国民と国民との親善や友愛を説くものとは全く異なって、それはナショナリズムと鋭い緊張関係にあるものであった。以下において検討しようとしていることはまさにこの点にあるのである。

愛国心や非合理的なナショナリズムの感情を退ける立場は、エンジェルが評論活動を開始した当初からのものであり、彼は、国家間の権力闘争の不可避性という観念を打破するために、それを支えている愛国心あるいは国家についての人々の意識を打ち砕こうとしたのである。[5] 本稿ではまずエンジェルの相互依存論を中心に、彼の国際主義の根底にある現代世界についての認識を探り、国境を越えた関係、すなわちいわゆるトランズナショナルな関係の進展とそれに伴う国民国家の変容についての彼の見方を明らかにし、つぎにエンジェルの視野にあった国際社会がどのような理論的枠組みをもって考えられていたかを検討することとする。

(1) このような評価が確立されている訳ではない。この問題については別の機会に論じることにしたい。ここではつぎの点を指摘するにとどめることとする。国際政治学の「現実学派」によって批判の対象となっている初期国際政治学の「理想主義的」諸観念の基本的なものは、まさにエンジェルのもの――当時の平和主義者の考えに近づけることにより歪められたもの――であったということである。

(2) A. Marrin, *Sir Norman Angell*, Boston, 1979 ; L. Bisceglia, *Norman Angell and Liberal Internationalism in Britain 1931-1935*, New York & London, 1982 ; E. A. Risinger, *Norman Angell : Critic of Appeasement 1935-1940* (D. Dissertation Ball State University, 1978), University Microfilm International, Michigan, 1984 ; J. D. B. Miller, *Norman Angell and Futility of War : Peace and the Public Mind*, London, 1986 ; Jaap de Wilde, "Norman Angell: Ancestor of Interdependence Theory" in J. N. Rosenau and H. Tromp eds., *Interdependence and Conflict in World Politics*, Aldershot, 1989.

(3) de Wilde, op. cit., p. 16.

(4) Angell, *The Unseen Assassins*, London, 1932, p. 40 ; cf. p. 92.

(5) Angell, *Patriotism under Three Flags*, London, 1903 ; id., *The Great Illusion*, new edition, repr., 1914, part III.

一　国家の分解

エンジェルの国際主義についての考察にはいる前に、第一次大戦前の政治論における彼の議論の特異性について指摘しておきたい。第一に、伝統的な「国際政治」観批判の脈絡で権力政策批判を行っている点がある。そもそも十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのイギリス《政治学》において国際関係ないし国際問題への関心は高いといえるものではなかった。例えば、当時のイギリスにおける政治学説を代表する理想主義的国家論において、国家間の関係は持続的な

論議の対象とされることはなかった。理想主義的国家論者は自由貿易による調和的世界を疑問視することなく仮定したがゆえに、国家間の関係について論じることはなかったのである。[1] これに対しエンジェルは、本稿における考察が明らかにするように、諸国民の相互依存を強調することを通じ、高度工業国家全体に係わる問題としての国際政治について論じたのである。エンジェルは、権力政策をある特定の条件のもとで諸国が必然的に採ることになる政策、そして諸国全体に悪い結果を及ぼす政策として論じ、そのような条件の除去のなかに平和を探求したのである。第二に、エンジェルが国家体系に挑戦した点である。理想主義的国家論者が「国家の発展」に関心を寄せ、戦争の原因を「国家の機能の不完全な遂行」に求めた[2]のに対し、エンジェルは《桎梏としての国家》に関心を寄せ、そして近代の主権国家が現実の状況にマッチしないものになっていることを明らかにしようとした。

国家ないし政府の極小化の思想は自由主義の歴史とともに古いものがある。十九世紀の経済的自由主義は、通商・貿易の世界から政治を追放し、自由貿易を拡大することのなかに平和を展望するものであった。エンジェルの国際主義が、自由貿易論者の国際主義に連なるものであることは、彼が諸国民の友好・親善の基礎を諸国民の《相互依存》に求めたことに端的に表れている。彼の相互依存論は古典派経済学の国際分業論を基本としたもので、これに依拠して彼は国際分業から国際社会の成立を説き起こそうとしたのである。

エンジェルの頭にあった分業とは、財の交換をしている「各人が、他者の側で労働を続けうるという事実に、彼の存在そのものを依存させている」関係のことである。[3] 分業関係にある当事者は、交換を続けていずれ彼の労働の果実を刈り取ることになるであろうと予想するか、あるいは交換を断った場合には両方とも飢えねばならない、という「まっとうな予想」をもっている。[4] 交流している者同士のこのような関係がエンジェルの考えた相互依存であった。彼はコミュニケーションが早まれば早まるほど分業は進み、分業の進展は仕事を共有している者の間の必然的な相互依存の条件を

作り出すと考えた。国際関係についていえば、国際分業の進展によって諸国民の間に相互依存的関係が作り出されるのであった。

国際的相互依存についてエンジェルが特に問題にした点の一つは、国境横断的関係の進展ということであった。そしてこの関係の進展が、諸国民の単なる集合を越えた、一つの有機体を成立させることになるとみたのであった。このことによって諸国民間の関係は、一つのシステム内の諸部分間の関係になっている、とエンジェルはみなした。[5] 国境横断的に、すなわち政治的境界を越えて行われる工業諸国民間の活発な経済活動により、ヨーロッパには「国境横断的経済」(transnational economy)が成立するに至り、ヨーロッパ諸国民の大部分は国境横断的経済のお陰で生活しているのであった。[6] 彼のこの主張は最近におけるトランズナショナリズムの先駆をなすものであったといえるであろうが、彼が主として論じたのは、政治的境界と経済的境界とが一致しなくなったということであった。

十九世紀末から二十世紀にかけての相互依存について、エンジェルは、特に金融面でのそれについて論じたのであった。すなわち「信用が築いた金融と工業の繊細な相互依存」である。エンジェルは最近になって人々の耳目を引くようになった事柄として、銀行業と国際関係との結びつきを取り上げ、これを現代における相互依存の中心的な現象とみた。銀行業について彼が特に問題にしたのは、環境に対するその感覚機能であった。信用取引は、動物における感覚神経のように、経済的・社会的有機体の感覚機能――現代になって創り出された機能――を果たし、環境に対する適応に役だっている。有機体の右の働きをエンジェルは、感応性(sensibility)すなわち生物体的意識と呼んだ。銀行業は社会的有機体にとってのそのような感覚神経となっており、これによって有機体の諸行為の整合性や、結果の認識を伴った行為が可能となっている。[7] このような感応性が発達したことによって、有機体の一部となっている国民は外への依存の程度を量ることができるのである。[8] だが、彼によれば、政治において右の感応性の重要性は一般には認識されていないの

であった。[9] しかし早晩そのことは政治の世界でも認識されることになろうと彼は考えた。すなわち今世紀における相互依存の進展のなかで、銀行家たちは戦争の危険を冒すような政策の国際的な悪い効果を感じるにいたり、また銀行業の感覚機能は世論に影響を与え始めるにいたった。これらのことは遠からず政府に影響を与えずにおかないであろうとエンジェルはみなした。[10] 問題は政治が依然として古い観念の支配する世界にあって、右のような事実の認識にたって動いてはいないことなのであった。

エンジェルは、金融的相互依存のなかで、富や交易が、侵略者の利益になる没収や妨害の対象となりえないものとなっており、しかも財産の没収など、被侵略国に有害な効果をもたらす行為は、侵略国にも有害な効果をもたらすものとなっているとみた。このような相関関係のなかで、国家は事実上隣国の金融的安全に依存せざるをえなくなっており、またこの経済的必要から、一国の政府はその侵略政策を変えざるをえなくなっている、と彼は診断したのである。

既に指摘したように、エンジェルは相互依存を説くにあたって、政治的境界と経済的境界との不一致ということを強調した。社会有機体の部分間の協働（co-operation）が完全なものとなると、「共同社会の経済的利益のみならず、道徳的利益の限界を定めることは不可能になる」。[11] ということは国家がもはや共同社会の限界を定め得ないということである。「しかるに国民間の敵対が基礎をおいているのは国家の境界なのである」。[12] 先述の国境横断的関係こそは、この国境、すなわち純粋に因習的なものであり、そして人類を独立した、あい戦う国家に生物学的に分断することの科学的不条理を表しているものを突っ切っている結合関係なのである。[13]「分業の複雑さは政治的境界を横断した協働を諸集団間で進める傾向にあり、かくて政治的境界はもはや経済的境界を限定したりあるいはそれと合致したりすることはない」。[14]

境界によって共同社会を区画している国家、すなわち領域国家は他の共同社会との敵対を持続させている政治集団に過ぎないのである。エンジェルは、国家というものを愛国心や民族感情を煽って敵対を醸成するものとして捉えた。排

他的忠誠心は破壊的な好戦性を生み出す。国家は、相互依存の進展の中で、共同社会を体現してなくなっているだけではなくて、反社会的かつ破壊的なものとなる支配の本能を刺激する類のものとなっている。[15] エンジェルはこのような国家が、社会的結合の機能をなお果たしているのは、社会において過った観念がなお支配しているからであると考えた。そしてそのような観念として国家の擬人化を取り上げ、これを厳しく退けたのであった。

エンジェルは、国家論の権威ですらがアリストテレスの国家概念になお訴えていると指摘して、現実の国家の性質の変化が正確には認識されていないと説いた。国民間の紛争や国際的好戦性は、「同質的全体としての国家概念」を一般に表しており、それによって国家の擬人化が行われている。だが現在では国家が一個人とみなされうる場合は殆どない。エンジェルによれば、権力政治論は右のような個人と国家とのこの「致命的なアナロジー」から出ているのである。[16] 国家は決して同質的全体ではない。国家を規定している諸境界は擬人化された国家の概念と合致しない。フランスの道義、ドイツの道義に対立するイギリスの道義が存在する訳ではない。他方でイギリスについて本当であることは他の総ての国について本当であることもある。すなわち生活についての考え方で、そのうちのあるものは同一国内で全く対立しているし、そのうちのあるものは外国における考え方と全く合致している。[17]

したがって、英独の対立といっても、同質的に一体化したイギリス人とドイツ人とが対立しているわけではない。英独対立でいわれる「ドイツ人」は「存在しない抽象」なのである。[18] エンジェルはこのように現実には存在しないものを存在するかのごとくみたてていることに紛争の重大原因を見いだしたのであった。

国家の擬人化においては、人民と、一国の他国に対する敵対を必然的なものにした政府の行為との同一視が行われてきたが、現代ではこれを変える新しい要因が生じている、とエンジェルは観察した。一つは国民共同体がかつてなかったほど複合的なものになっていることである。第二に、他の利益に優位する人類的利益がかつてなかったほどに国家的

境界線を横切っていることである。第三に、仮定されている国家的連帯を取り替えて階級や観念の連帯で埋め合わせることが、現在のコミュニケーション手段によって可能になったことである。[19] トランズナショナルな関係の進展のなかでこのような変化が生じている以上、国家を同質的に一体化した一つの実体とみることはできないことなのだと、エンジェルは主張したのである。

この国家擬人化の批判はさらにつぎの主張につながるものであった。第一に、観念におけると同様、行為における一つの単位として国家を考えることを退け、このことを通じ国家を一枚岩的な権力主体とみなすことを誤りとみることである。そしてこれは国家に一元的主権があたえられていることの否定へとつながっていく。第二には、国家間の利益の本来的対立の観念の否定を基礎づけることである。ただしこの議論はエンジェルにおいては展開されていない。

ここでは、エンジェル同様当時の国際主義者であったレナード・ウルフ（Leonard Woolf）の主張を参考にしながら右の議論について考察することにする。ウルフは第二次世界大戦勃発後に、E・H・カー（E. H. Carr）などの「リアリスト」の主張に反論した際に、彼らの利益対立という観念を取り上げ、彼らの見方は利益観念を固定化し、それによって利益対立を固定化するものであると批判したのであった。ウルフもエンジェル同様に、実体としての国家を否定し、そして国家の利益といってもそれは国家を構成している個人の利益であるという観点をとった。全体としてまた長期的に国家間に利益の根本的対立があったとしても、利益とその対立はある特定の時点では流動的かつ不安定であり、すべての国家の利益が他の国の利益と常に対立しているとみることは空想的であるし、間違っている。[20] このように「客観的社会的利益」の存在を否定する観点からみれば、国家利益の必然的対立の理論は、ナショナリズムの感情と国際的対立を合理化するために発展させられたものであるということになる。ウルフによれば、国民のみならず諸社会集団の利益はある特定時点での客観的事実のみならず、「彼らの利益が何であり何でないかに関する諸社会集団内の個人の信条に

よって決定されている」のであった。[21] もしも利益と力が、擬人化された国家にではなく、国家を構成している個人に結びついたものであるならば、国家的利益とか国力といわれるものは、組織化された個人の結合体に結びついたものである。このような集団的利益と力とは単純・不変のものではなく、極度に複雑で、多くの場合に不安定である。この複雑性と不安定性ということからいって、利益と力とが同一のままの状態にあって、一つの特定した、不可避的結果をもたらすということは不可能である。[22] 以上のように論じて、ウルフはリアリストにおける諸国民の利害の本来的対立の仮説を批判したのであった。

さて、国家間の利益の本来的対立の否定は、エンジェルの場合、これによって対立解決の手段としての強制力ないし実力（force）の無益性を立証しようとするものであった。相互依存的世界における国境横断的関係の進展は、単に国家内の諸集団が外の社会の諸集団との結びつきを強めるということを意味するものでなかった。それは強制力が役にたたなくなる、あるいは実質用いえなくなることを意味するものであった。この実力無益性の主張は、国家を国際関係における権力単位としても解体してしまうものであった。

通商と貿易をつうじ、国際間の交流がますにつれ、物理的強制力が財とサービスの自由な交換に、そして軍国主義は商業に置き換えられていくとみるのは、自由主義的国際主義の掲げた将来展望である。エンジェルもこの思想的伝統を引き継いでいる。「武力から単純な経済的利益へと向かえば向かうほど、その努力はより良い結果で報われる。」エンジェルはこの過程を人類史上のいかなる集団――部族、ネーション――の間においても進行する過程として捉えた。[23] そしてこの過程をとくに現代における相互依存に関連させて論じたのである。すなわち、有機体の部分間の依存の新しい強化とともに、「電信と銀行が軍事力を経済的に無益ならしめた時代」へと進んだのである。エンジェルはこの変化の状態をつぎのように説明している。「諸部分の相互依存は増大した。そして一部分が自分に害を加えることなしに他の部分に

害を加えることの可能性は減ってしまった。各部分はますます他の部分に依存しており、したがって加害衝動は必然的に減退せざるをえない。そしてその事実は日々人間の好戦性を変えざるをえないし、変えている[24]」と。彼に従えば、同一の有機体の諸部分間の闘争が必然的であるかのごとく言う者は、人間のもっている好戦性や戦闘性の向けられる方向が変えられるということを理解していないのである[25]。

右に考察したように、相互依存は他国への加害が同時に自己利益の破壊であるような関係と理解されたから、エンジェルにおいて、相互依存の進展は武力の無益化を意味するとみられたのである。軍事力の行使が無益だということになれば、軍事力行使の態勢をとりうることによって、各が武装した単位間の関係である国際関係において防衛主体たりうるという観念もまた否定されることになるのであった。エンジェルは、国際主義者として熱心な集団安全保障論者であった。すなわち彼は、国際的アナキーを前提にして、それぞれの国家が単独防衛のシステムによって安全保障を図るという考えを根本から退けたのである。このようにして彼は、安全保障面で国家が独立の単位として機能することの意義も否定したのであった。

以上にみられるように、エンジェルは相互依存的世界における国境横断的関係の進展を通じ、国内の諸集団――どのようなものか明らかにされているとはいえない――が国家の政治的境界を越えて結びつくようになっていると指摘し、また同質的実体としての国家はそもそも存在せず、国家的敵対という間違った知覚は、国家の擬人化にその原因があると論じ、国家そのものは、その領域支配から脱しつつある集団や個人に分解しつつあるとみたのであった。このような現実認識と将来展望に基づいて、エンジェルのいうところの国際主義が主張されていたといえるのである。

(1) P. Saviger, "Philosophical idealism and international politics : Bosanquet, Treitschke and War", *British Journal*

of *International Studies,* 1, April 1975, p. 50.

(2) *Ibid*., pp. 53, 51.

(3) Angell, *The Great Illusion,* p. 48.

(4) *Ibid.*

(5) 拙稿「戦間期イギリスの相互依存論」ヨーロッパ現代史研究会編『国民国家の分裂と統合』所載、参照。

(6) Angell, op. cit., pp. 195-96 ; id., *The Fruits of Victory,* London, 1921, p. 63.

(7) Angell, *The Great Illusion,* pp. 139, 143.

(8) Angell, *The Foundation of International Polity,* London, 1914, p. 104.

(9) Angell, *The Great Illusion,* p. 139.

(10) *Ibid*., pp. 149-50.

(11) *Ibid*., p. 195.

(12) *Ibid*., p. 196.

(13) *Ibid*.

(14) *Ibid*., p. 156.

(15) Angell, *The Fruits of Victory*, p. 310.

(16) Angell, *The Great Illusion*, p. 290.

(17) *Ibid*., p. 298.

(18) *Ibid*., p. 306.

(19) *Ibid*., p. 308.

(20) L. S. Woolf, *The War for Peace*, London, 1940(New York & London, 1972), pp. 153, 200.

(21) *Ibid*., p. 200.

(22) *Ibid*., pp. 150-51.

(23) Angell, *The Fruits of Victory*, pp. 101-2.

(24) Angell, *The Great Illusion*, p. 272.
(25) *Ibid.*, p. 273.

二　国民の昇華

一九三二年にエンジェルは次のように書いた。「ヨーロッパは、『絶対的』ナショナリズムに基づいた敵意と激情でもって沸き立ちながら、解体しつつ混沌としたものになっているという意味で、ナショナリスティックなヨーロッパである」[1]と。三〇年代の状況の中で、エンジェルは、当時のヨーロッパの政治と経済において、ナショナリズムが最も重要な要因、最も強力な力であることを認めざるをえなかった。しかし彼がその根本思想においてナショナルな単位からなるヨーロッパが解体しつつあるという考えを変えたわけでなかったことはいうまでもない。

両大戦間期の国際主義者は一般に、ナショナリズムの心理の源泉を愛国心に求めていた。エンジェルにおいてもヨーロッパ崩壊の危険は「愛国心にまとわりついている観念や感情」に起因するとみられていた[2]。したがって人間が平和と自由のうちに生活していくためには、ナショナリズムの感情に、そして愛国心に変化がもたらされねばならないのであった。

前節で考察したように、エンジェルは、相互依存の進展の中に国家の分解を展望したが、それでは彼はその過程の中で国民ないしナショナリズムにどのような変化が起こると予想したであろうか。もしエンジェルが、国民が国家を作るのではなくて、国家が国民を作るという考えを明らかにしていたとするならば、国民一般の将来についての展望は自ら明らかである。エンジェルは国民についてのそのような観念を示してはいないように思われる。しかし彼が国民をその

結合力の分解において捉えていたということは言いえよう。このことは相互依存を通じて世界に成立することになる《社会》についての彼の観念に明らかである。

エンジェルは社会一般が分業に基づいて形成されると考えた。分業がなければ、組織的社会の成長はありえないのであった。なぜなら分業がなければ、人間の協働の必要は生じえないからである。生活する上で必要なことの総てを独力でなしうる人間は、隣人の生死に何の反応も示さないであろうし、隣人に対する義務も、協力の必要性も感じることはないのである。[3] このように論じて、エンジェルは、人間が協力しあうということの基礎を分業ないし相互依存の進展の中に求めたのである。

エンジェルは既に『大いなる幻想』において、相互依存の中に、単なる諸民族の集合ではない、ある共同社会の形成を将来に向けて展望したのであった。相互依存世界の中で国民はそれ独自では生存していくことはできないということをふまえて、エンジェルが示したものは、国境横断的に成立している利益共同体の成立ということであった。そこでの諸国民の関係が一つのシステム内の諸部分間の関係であるということから、ナショナリスト的仮説、すなわち甲国の得は乙国の損という経済関係によって、諸国民の利益が必然的に対立するという仮説はもはや成立しえないのであった。エンジェルはつぎのように書いている。『大いなる幻想』が挑戦したのは、「諸国民の死活的利益は対立しており、そして戦争は諸国民の間での不可避的な生存闘争の一部であるという理論」であった。[4] 彼は、諸国民の不可避的な闘争の関係に対置される諸国民の利益合致の関係の成立を明らかにしようとし、そしてナショナル・エゴイズムに反対する主張を展開したのである。相互依存は分業を基礎にしているということから、それはまず基本的に互恵的関係である。交流している双方は、相手の繁栄の中に自己の繁栄を期待することができ、双方の利害は合致している。

これは自由主義の国際主義の根本的主張であるが、このことに加えてエンジェルが相互依存世界に現れた変化として

特に強調したことは、既述のように、国際経済関係に危害をもたらすような行動は、自国への危害となって跳ね返ってくるという意味でも、諸国間には利害の消極的な合致がみられるという点であった。エンジェルによれば、現代の相互依存は「繊細な相互依存」であり、かくて国境横断的経済で活動している諸国の経済主体は、「利他主義の問題としてではなく、商業上の自己防衛の問題として」、そこでの混乱や損失を避けるために協力しあわねばならないのであった。[5] このような協力の過程は、エンジェルによれば、「二人の当事者のうちの一人が生き延びるとするなら、双方が生き延びねばならず、一人が死に絶えれば、双方が死に絶えるという条件を作り出す」のである。[6] このような関係を示す例として、彼は、大海の真ん中で、浸水しているボートに乗っている二人の人間――漕ぎ手とあか汲み――の関係を挙げている。[7] この関係からエンジェルが引き出している結論は、まず、双方にとって協力が必須なものとなるということであった。

以上のように、エンジェルは、相互依存世界における利害の合致ということを強調して、諸国民の協力の必然性を説き、協力の必要の盾の反面として、すでに前節で考察したように、実力の無益化について論じたのである。そしてさらに道徳的・知的相互依存についても論じたのである。

経済にみられた国境横断的交流と結合は、国境を越えた心理的な結びつきをも作り出すものであった。エンジェルは相互依存の進展のなかに諸国民の同質化を見いだそうとした。「社会的有機体の諸部分間の協力が、われわれの機械器具の発展が近年成し遂げたのと同様に完全なものとなったとき、経済的関心のみならず、社会の道徳的関心の境界を固定することは困難になるし、また一つの社会と他の社会との違いを言うことは困難になる」。[8] 彼は国境横断的関係の緊密化によって、一国内のある社会集団が、同国内の直接関係をもつことの少ない集団に対してよりも、別の国の同種の社会集団に対してより感情的親近感をもつようになるということを指摘している。[9]

このようにエンジェルは、国境横断的関係の進展によって感情の領域にも変化が生じていることを力説したのであっ

た。彼は大国―小国の区別によって、それぞれの国の市民が相手の国に対して特別の感情をもつべき根拠も失われるとみた。いまや大国の個人は、大国のゆえに小国の市民に対して、誇りや自惚れといった感情的に優越した立場にたつことはない。「外国が毎日の生活の生の事実となることによって、現在諸国家を分かっている実際の感情が僅かなものとなるとき、外国の威信は殆ど問題とすべき事柄でなくなる。物質的事柄において利益の共同体と関係が国境を突切っているのと丁度同じく、関心の心理的共同体（psychic community）が不可避的に国境を突き通ることになるであろう」[10]。

この関心の心理的共同体の成立に関連して、エンジェルは第一次大戦後に国民の利己主義（selfishness）の排除を説くことになる。この主張の基礎に置かれたのは、諸国内のそれぞれの市民が一つの社会（すなわち世界社会）の一員であるということの意識の要請であった。「相互依存の知識は、少なくとも、『社会的感覚』――一種の取り決めは公正かつ実行可能であり、そして外のものはそうでないという感覚――を作る態度の一部である。この相互依存の事実を感じさせることは、単に自己利益への訴えではない。それは、死活的要求の一見したところ和解不能な対立を、調整可能にするところの手段を明らかにすることである。相互依存の感覚、自己のために他者を求める感覚は、きわめて困難な共存術の根本の一部をなしている。」[11]この相互依存の感覚は、自国だけによる生存はありえず、他国民に経済的に依存しなければ生きていけないという意識であり、そしてこの意識は同時に、諸国民は協力しあわねばならず、他国民に義務、特に生存の権利を認めるという義務を負うにいたったことを意味すると理解されたのであった[12]。

このように、共通の経済的必要、これから生ずる相互的取り決め、社会的掟の実際の構造に、エンジェルは、「世界社会の最初の目に見える構造」の端緒を、そしてこれを起源とした「より鮮明な広域社会の感覚」の形成を展望したのであった[13]。

以上に考察してきたような世界社会についての議論を基礎にして、三〇年代になると、戦争の危険の増大という状況

を前にして、エンジェルは単独防衛の不可能性と集団的防衛すなわち集団安全保障の必要性を訴えることになる。エンジェルは既に第一次世界大戦前に「国際政治組織」(international polity) の設立を提唱していた。三〇年代の状況のなかで彼はその主張をさらに押し進めることになるのであった。彼も外の「国際主義者」同様に、連盟規約の下での侵略者に対する集団行動の義務を力説した。「もし組織化された社会において個人が他者を守ろうとする責任をとらないならば、彼は自らを守ることができないであろう。法は、罰を与えるが故にではなく、保護するが故に強力となる」。彼は「社会全体による集団的な防衛組織」による平和を訴えたのであった。[14]

エンジェルの場合、集団安全保障体制の下での相互防衛のための集団行動は、後にリアリストが批判するように、諸国民の利益の合致、関心の利益共同体の成立を前提にして主張されていたといえるであろう。そしてその主張は、世界的道義、世界的法の支配を仮定するものであった。また、愛国心の徹底的排斥や国家ないし国民に対する忠誠の上に国際連盟に対する忠誠を置こうとするものであった。

国家の擬人化にたいする批判のところで述べたように、エンジェルは道義の超民族性を説いたのであった。彼は「ショナリスト」が国家間の関係を支配する道義が個人間の関係を支配する道義と異なるとみなしたのに対し、両者の同一性を強調した。道義に国境はないのである。道義もトランズナショナルな性質のものである。[15]

エンジェルの集団安全保障論は先に述べた国家の分解や文明と主権・独立的国家との非両立性の観念に基づくものであったといえる。エンジェルの国際政治観においては、主権国家の集合は国際的アナキーあるいは「武装したアナキー」(armed anarchy) であって、「社会状態」ではないのである。この「武装したアナキー」に代えらるべきものは「武装した社会状態」(armed society) であって、「非武装のアナキー」ではなかった。[16] このことこそ平和主義者に向かってエンジェルが再三再四力説した点であった。この「武装した社会状態」こそ、国際連盟システムで想定されているとみ

なされた、集団安全保障のシステムをそなえた社会なのであった。この社会が武装しているということの核心は、それが「共同の強制力」(pooled force) をもつということにあった。それは各国の軍隊の結集したものに外ならない。世界に侵略が生じた場合に、連盟加盟国の結集した武力が容易に成立すると見たところに、エンジェル的国際主義あるいは戦間期における連盟＝平和論の特質があった。

この主張においては、国際連盟の成立によって、侵略があった場合にそれに対し制裁を加えるという「規約」(covenant) に諸国は同意しており、ここに成立をみた合意は、規約が予想したような事態が発生したとき、世界中の自発的反応となって現れる、と仮定されていた。すなわち、侵略行動があった場合に諸国民は、平和に共通の利益を感じているので、連盟規約上の義務を守って、進んで犠牲を払おうとすると信じられていたことである。この問題でエンジェルの考えを検討する場合には特に次のことを指摘しておくことが必要であろう。

第一は、エンジェルが、それぞれの国民は正しい判断をすることはできないとみていたことである。「権利、防衛、独立、主権、より凶暴な現代的タイプのナショナリズムへの要求の根底にあるのは、国民は、それが公正に行動するとき、すなわち守勢的に行動するとき、完璧に判断しうるという仮説である。」エンジェルによればこの仮説は成立しないのであった。例えば、ある戦争が自衛的なものか侵略的なものかを国民が公正に判断することはできない。「人間は不完全で党派心がきわめて強いので」、紛争当事者のいずれも自己の問題でその裁判官となる資格はない。[17] エンジェルは紛争解決の理想的形態を基本的に第三者裁定に求めた。この第三者裁定の要請から、「共同の強制力」は国際社会全体の手段であり、その背後には国際社会が同意した法があらねばならないのであった。それぞれの国の中で、主権的な存在である国家は、「法形式による共通意志」を確立するために物理的強制力を行使する。集団安全保障体制において、集団行動決定の背後に仮定されているのは、「法形式による共通意志」の確立なのであった。[18] いいかえれば、現実の諸国家の抗争にみ

られる利害関係は、共通利益としての平和の前に、殆どネグリジブルなものとなるのである。

つぎに、国境横断的関係と脱国家的関係の同一視がある。エンジェルは、国民社会について述べて、共同の制裁が可能になるためには、社会のなかにかなりの程度の目的および社会的・道徳的観念における一致がなければならないことを示唆している。[19] この脈絡でいえば、諸国家による共同制裁の主張は、国際社会で目的と社会的・道徳的観念におけるかなりの程度の一致の存在を仮定していたことになる。それではこの条件はどのようにして成立していると考えられたであろうか。国際連盟＝平和論者ないし「国際主義者」全体に即していえば、国際連盟の成立それ自体が、そのような条件の成立を示すものと主張されたのであった。彼らは国際連盟の成立によって国際社会には根本的な変化がもたらされたとみなした。国際連盟に加入することによって、諸国民は「世界社会の市民」(citizens of world community) となっており、そして平和維持と文明諸国の共通利益促進のための制度と義務の世界的な網の目に組み込まれていると考えられたのである。[20] この脈絡で「世界的忠誠」(world loyalty) の観念が示されることともなったのである。一九三三年に、労働党の議員で二年後に党首となるアトリー(Clement R. Attlee)は、議会における政府の外交政策批判の演説で、国際連盟を真の連盟にしなければならないと主張して、「自分の国に対する忠誠の上に、国際連盟に対する忠誠を置かねばならない」と述べたのであった。[21] 愛国心とナショナリズムの強硬な批判者であったエンジェルではあるが、国際連盟の成立によって、諸国民が世界社会の市民となり、したがって世界的忠誠が求められるにいたっているというように、単純明快には述べることはしていないように思われる。しかし脱国民共同体への見通しにおいて、国際社会の将来を考えていたことだけは確かである。一九三三年にエンジェルは、「国王や国のために戦わない」というオクスフォード大学学生同盟の決議を念頭に置きながら、つぎのように書いた。「もしも部族の忠誠が国民を含むものにまで拡大され、国民が諸国家を含んだよりおおきなものにまで拡大されうるとするならば、もろもろの忠誠心が国際連盟のような考えを含

んだものに拡大されてならないという理由は……なにもない。国際連盟のような機構をよく知っている者は誰でも、少なくとも新しい忠誠心――したがってまた新しい敵意――が多くの者の心に生じつつあることを疑うことは決してできない[22]」と。

以上の考察から、エンジェルの国際主義が相互依存による国家の分解という国際政治認識と国民共同体の世界社会への昇華という展望に基づいていることが明らかになった。このような国際主義に対しては、当時からさまざまな批判のあったところである。ここではそのような同時代の議論のうち、とくに相互依存論に関連した論議に即して、エンジェルの国際主義の問題点を探ってみることにする。

(1) Angell, *The Unseen Assassins*, London, 1932, p. 40.
(2) *Ibid.*, pp. 184, 186.
(3) Angell, *The Foundation of International Polity*, p. 99.
(4) Angell, *The Fruits of Victory*, p. 269.
(5) Angell, *The Great Illusion*, p. 49.
(6) Angell, *The Foundation of International Polity*, xxii.
(7) *Ibid.*, p. 17.
(8) Angell, *The Great Illusion*, pp. 195-96.
(9) *Ibid.*, p. 196.
(10) *Ibid.*, p. 197.
(11) Angell, *The Fruits of Victory*, p. 279.
(12) *Ibid.*, p. 309.
(13) *Ibid.*

(14) Angell, *Preface of Peace*, London, 1935, pp. 164, 155-56.
(15) Angell, *The Great Illusion*, p. 298.
(16) Angell, "Weak Points of Pacifist Propaganda", in G. P. Gooch ed., *In Pursuit of Peace*, London, 1933 (New York 1970), p. 42.
(17) Angell, *The Unseen Assassins*, pp. 278-79.
(18) Angell, *The Foundation of International Polity*, xix.
(19) *Ibid.*
(20) Vigilantes, *Dying Peace*, London, 1933, p. 39.
(21) *Parliamentary Debates, House of Commons*, vol. 281, col. 148.
(22) Angell, "Educational and Psychological Factors", in L. S. Woolf ed., *Intelligent Man's Way to Prevent War*, London, 1933, pp. 470-71.

三　利益共同体の仮構性

一九三〇年代は、国家軽視の思想が高まった二〇年代の後に続く、国家軽視の観念と現実との懸隔が広がった時代であった。諸国においては経済ナショナリズムが高まり、自由貿易、国際分業、海外依存は新たな局面を迎えていた。また国際連盟は現実の国際紛争と取り組む過程で、その無力さを明らかにしていった。相互依存の進展は、確かに国境横断的関係の緊密化を意味したが、国民国家体系を崩壊させはしなかった。ナショナリズムはいうに及ばず、国民国家も単なる神話の世界に属するものではなかった。国民国家はなお固有の統一性を維持し続けていた。国際主義にみられる観念と現実との懸隔の根底には、十九世紀自由貿易論者によって自明視されていたことが、現実によって挑戦されたと

いうことがあった。そして、権力政治に対置された互恵的・調和的関係としての国際経済の観念そのものも支持されなくなっていくのである。経済学におけるそのような理論上の変化を検討することは、私の立ち入りうるところではない。ここでは、三〇年代に現れたJ・M・ケインズの自給自足論を手掛かりにエンジェル的国際主義の問題点を探ってみることとする。

カール・ポラニーは、十八世紀後半以降における国際分業の成立によって、「ヨーロッパ諸国は、人類生活の統合といういまだ確たるものにはなっていない体制に自分たちの日常生活を依存させることになった」と指摘するとともに、ここに「新たな恐るべき賭け」としての地球的規模の相互依存が発生したと述べている。[1] 彼によれば、十九世紀になると自由貿易論者たちは、「土地が国の領域の一部をなすこと、主権の地域的性格はたんに感情的な結びつきの結果ではなくて、経済的なものを含めた膨大な諸事実の結果でもあることを忘れてしまっていた」。[2]

三〇年代は、十九世紀の自由貿易論者が忘れてしまっていたことを思い起こさせた時代であったといえよう。ロンドンのシティーを中心に運営されていた国際経済体制は破綻し、自由貿易体制は試練に直面するにいたっていた。外部世界の経済ナショナリズムに対し、自らの側も同じく経済ナショナリズムの道を採ることが各国の支配的な対応策となっていた。

J・M・ケインズは一九三〇年代の初めに、ニュー・ステーツマン・アンド・ネーションに、自給自足論を発表している。その冒頭でケインズは、自由貿易が思慮深いイギリス人にとって一つの経済的教義にとどまらず、殆ど道徳律の一部となっていたことを指摘している。この論文のなかで彼は、その基本的真理性に反対すべきところはないとしながらも、彼の志向するところは変化したとして、その変化した所以について述べている。ケインズによれば、十九世紀の自由貿易論者の信念はつぎの諸点にある。第一に、「自分たちが完全に良識的で、自分たちのみが明敏であり、そして理

想的な国際分業に干渉しようとする政策は常に自己利益からでた無知の所産である」と信じていたこと。つぎに、世界全体のために、世界の資源と能力を最善の利用に供することにより、彼らが貧困の問題を解決しつつあると信じていたこと。第三に、彼らは、経済的適者の生存に対してのみならず、自由の大義にも仕えていると信じていたこと。最後に、彼らは、自分たちが平和と国際親善と経済的正義の友でありかつ保障者であり、また進歩の恵沢の伝播者であると信じていたこと、である。[3] ケインズの見るところ、以上の信念は、うわべの評価では何の欠点もないにしろ、現実に機能している政治理論としては、つぎのような点で間違っているのであった。

最初に、ケインズは自由貿易論者が平和の使徒として登場しうるかに疑問を投げかける。外国貿易の獲得に国民的努力の大半を集中させること、外国の資本家の資力と影響力の一国の経済構造への浸透、外国の流動的な経済政策にイギリスの経済生活をつよく依存させること――これらが国際平和を保障するものであるかは明らかではない、と。彼は、逆のことを主張することのほうが容易であると書いた。「一国の現存の海外利益の保護、新しい市場の獲得、経済的帝国主義の進展――これらは、国際的特化を極限まで押し進め、また所有の中心をどこに置くかに関係なく資本の地理的拡散を極限まで進めようとするもくろみの殆ど避けることのできない部分である」。[4] 彼は諸国民間の経済的かかりあいを極大化することよりも極小化することに賛意を示し、財が合理的かつ便利よく国内生産しうる場合にはそうすべきだとした。なかんずく金融は国民的であるべきだとした。外へのかかりあいから解放された後には、「一九一四年以前に存したよりも大規模な自給自足と経済的孤立の方が、外の手段よりも平和に仕えるようになるであろう。ともあれ経済的国際主義の時代がとくに戦争の回避に成功したということはなかった」。このように書くと同時に、彼はまた、経済的国際主義の大きな成功は近い将来においても殆どありそうもないと指摘したのであった。[5]

経済的にはつぎのようになるとケインズは説いている。十九世紀には経済的国際主義者は彼の政策が世界の繁栄と経

済的進歩に貢献していると主張しえた。その世紀には経済的国際主義の利益が他の種類の不利益に優る原因となる二つの条件が存していたからである。一つは新大陸への大規模移民の時代にあって、移民とともに旧大陸の技術の成果の移転がなされたことである。つぎに、工業化の程度の大きな違いのあった時代にあって、高度な国民的特化の利益が顕著にあったことである。これに対し現在の世界には、十九世紀にみられたものに比すべき国際分業の利益は存しないとケインズは主張した。彼はかなりの程度の国際的特化の必要は認めたが、かなり広範囲の工業製品や農産物について、それらの自給自足のコストが、同一の国民的、経済的・金融的組織の中にいる生産者と消費者とに漸次もたらす他の利益を越えてしまう程大きいものになるかを疑った。その理由として彼は、殆どの近代的大量生産過程はどのような国、どのような気候においても殆ど等しい効率で進められうること、富が増すにつれ、一次産品と工業製品の両方ともが、国際的交換の目標とはならない住宅、個人的サービスおよび地方生活の快適性に比して、国民経済において相対的により小さな役割しか演じないこと、自給自足を増すことによって以前には生じた実質コストの緩やかな増大は、異なった種類の利益にたいして秤にかけた場合、重大な結果をもつものでなくなりうるという結果になること、をあげている。[6]

かつて存した国際分業の利益が失われつつあると主張するとともに、ケインズはまた、三〇年代の状況を、諸国がつぎからつぎへと経済的国際主義の仮説を放棄していっている状況として捉えた。すなわち、全世界が私的、競争的資本主義および法の制裁によって保護された私的契約の自由を基礎として組織化されているという仮定は、捨てられつつあるのであった。「レッセ・フェール資本主義」の古い観念になお執着している者もいるが、今日の世界のいかなる国においても彼らは重要な勢力とは見なされていない。彼は、「レッセ・フェール資本主義」の理想的原理に従って、なにか一様な均衡を作り出す世界的力のなすがままになるのは欲しないとして、「われわれは……われわれ自身の主人であること、そして外部世界の干渉からわれわれ自身をできるだけ自由にすることを欲する」と書いた。[7] そしてこの観点から、

自給自足強化の政策はそれ自体における理想としてではなく、他の理想が安全かつ適切に追求されうる環境の創造を目指すものと考えられるべきである、と彼は説いた。もとよりこのように言うことは、十九世紀のレッセ・フェール資本主義が、人間社会の理想と言えるような状態を作り出しはしなかったという考えあってのことである。彼はそれが生み出した「自己破壊的銭勘定」の帰結を示して、「十九世紀の人間は、莫大に増大した物質的・技術的資源をすばらしい市街を作るのに用いる代わりに、スラムを作った」と書いた。[8] それはイギリスが貧窮化していたり、以前よりもその生活水準が下がっていることを示すものではない。彼は、人々を幻滅に陥れているのが、外の価値を犠牲にしてきたことにあると指摘し、そして文明を変えることの必要とそのために国家の機能と目的についての観念を変えることの必要を説いたのである。[9]

エンジェルが主権的独立国家と文明との非両立性を主張していたのに対し、ケインズは経済生活に対する国家の比重の変化、経済運営における国家の機能の拡大を求めていたのである。国家と経済との関係についての観念に照らしてみたとき、エンジェルは、「レッセ・フェール資本主義」にたった十九世紀的な経済的国際主義の側に立っていたとみれるであろう。そしてこのレッセ・フェール資本主義で仮定されていた調和こそ、国際的な面においても、否定されるにいたるところのものである。第二次世界大戦後のことであるが、左派ケインジアンの経済学者ジョーン・ロビンソン(Joan Robinson)は、一九六五年に、「新しい重商主義」について演説したさいつぎのように述べた。今日の資本主義の世界において、「市場全体がすべてのものが参加できるほど急速に成長しないとすれば、各国政府は自国民の利益のために、国際経済活動における自国のシェアを拡大することが、価値ある、そして称賛さるべき目的であると感じる。これが新しい重商主義である」と。ロビンソンはさらに、資本主義の世界における国際経済関係がゼロ・サム・ゲームであることを指摘して、「自由貿易モデルの美しい調和は、はるかかなたに去っている」と述べたのであった。[10] この言葉は、経済的

国際主義への批判がなにも三〇年代の特異な状況を反映した特異な言説ではなかったことを示唆しているといえよう。

諸国における経済ナショナリズムの動きは、二十世紀的現実においても、人類生活の統合がいまだ確たるものになっていないことをこそ示していた。そしてそのような現実があるからこそ、国際分業と海外依存を自明視した国際主義からの脱却が求められてもいたのである。また経済運営において国家の占める比重が高まったことは、経済の国民化の進展を示すものでもあったと言えよう。これらによって、国際主義者が展望した利益共同体ないし世界社会の仮構性は明らかにならざるをえなかった。三〇年代という特殊な時代を過ぎた後にも、国家がなお固有の統一性を維持し続けていることに変わりはない。

(1) カール・ポラニー『大転換』吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美訳（東洋経済新報社・昭和五〇年）二四七頁。
(2) 同書、二五〇頁。
(3) J. M. Keynes, "National Self-Sufficiency" in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. XXI, London & Basingstoke, 1982, pp. 234-35.
(4) *Ibid.*, p. 236.
(5) *Ibid.*, p. 237.
(6) *Ibid.*, p. 238.
(7) *Ibid.*, p. 240.
(8) *Ibid.*, p. 241.
(9) *Ibid.*, pp. 242-43.
(10) J. Robinson, "The New Mercantilism", *Collected Economic Papers*, vol. 4, 1973. 荒川弘『新重商主義の時代』（岩波書店・昭和五五年）六〇―一頁より引用。

結び

国際化、国際交流、グローバリズムといったことに関連した言葉の氾濫とは裏腹に、第二次大戦後の世界では、国際主義はもはやかつての勢威をまったく失ってしまった観がある。他方で、第三世界におけるナショナリズムは、国際政治を動かす最も重要な要因の一つであり続けてきた。三〇年代の初めに、既にラムゼー・ミュアは、『相互依存的世界の諸問題』のなかで、相互依存的世界ではナショナリズムは危険な要因ではあるが、それはなお強力な建設力あるいは結合力をもっていると書いていた。[1] これらのことに即していうならば、エンジェルの国際主義あるいは一九二〇年代の国際主義は、歴史的にはきわめて限定された時代を反映し、そして一つの理想主義として、現実離れのした面をもった思想であったということは否定しえないであろう。だが、それが当時の政治的実践に対して重要な指針を含むものであったということは、けっして忘れてはならない点であろうし、また現在につながる研究上の問題提起を含むものであったことをみのがすわけにはいかないであろう。最後に、エンジェルの国際主義が現代に対し提起している問題について若干触れて本稿の結びとしたい。

相互依存の深まりのなかで国家の自己決定の条件は失われたという命題は、本稿の考察が明らかにしたように、エンジェルの国際主義の基をなしている国際政治認識であった。この認識にたってエンジェルは、国家の分解と国民の昇華という見通しをもったといえるのである。二十世紀も終わりに近づいている現在から振り返ってみた場合においても、国際分業の進展からエンジェルの考えたような国際社会すなわち世界社会の成立までにはきわめて長い道程を必要とするということは明らかで、エンジェルの命題をそのままで受け入れることはできない。国境を越えて行われる経済的交流あるいは経済的相互依存が国家の分解に繋ると主張するためには、資本主義を基礎にして成立した国民国家が、もと

もと外の世界との通商・貿易のなかでその経済、すなわち国民経済を発展させてゆき、しかも国際分業の進展してゆくなかで、それを維持したということの条件が明らかにされねばならないであろう。国境を越えて行われるモノ、カネの交流の量的増大は、政治的単位としての国家の存在を許さないような世界的利益共同体の成立に直結するものではない。ましてや心理的共同体の成立を告げるものではない。先述したようにラムゼー・ミュアがナショナリズムの結合力を積極的に評価した際、彼はまた、将来の世界が依然として国民国家の世界であろうと見通しうることの理由に、市民に一定の利益を与える国家形態が国民的な形態以外に見いだされないということをあげたのであった。[2] 現実世界分析の上での課題ということでいえば、エンジェルの命題の非現実性を問題にする場合には、主権の地域的性格をもたらし、それを現在なお支えている「経済的なものを含めた膨大な諸事実」を解明することが求められるであろう。つぎに国際政治の理論の面での課題としては、国際政治における協力ということの検討がある。いわゆるリアリストは、戦間期の「理想主義者」ないし国際主義者が政治を軽視したとか、力の要素を無視したとして彼らを批判したのであった。このような批判に関連してエンジェルの主張を検討してみるならば、エンジェルは確かに力の政治を糾弾したけれども、当時の平和主義者とは異なって、力や政治を無視したわけでないことは明らかである。確かに彼は闘争としての政治を否定的に捉えた。だが彼が説いたのは力という手段の無益性であり、しかもその際、力一般の有用性を否定したわけではなかった。エンジェルは闘争としての政治を超克する道を探ったのである。そしてそのことは共同社会成立の条件や協力(co-operation)の前提条件の解明へと彼を導いていったのである。分業や相互依存は、協力を要請する社会経済的条件としてもちだされているといってよいのである。相互依存の深まりのなかで、諸国間の利害調整のために人類的観点が強く求められるようになっている現在、エンジェルの国際主義に含まれている協力としての政治の主張は、今日的観点から検討されてしかるべき重要な課題を含んでいるといえるであろう。

(1) R. Muir, *The Interdependent World and its Problems*, London, 1932, p. 45.
(2) *Ibid.*